

ティーム・ティーチングによる実践の検討

～アクティブ・ラーニング指導時の変容について～

○鈴木 翔 (上越教育大学教職大学院)

西川 純 (上越教育大学教職大学院)

(j275625m@myjuen.jp)

要約

本研究は、アクティブ・ラーニングを導入した学級において、複数の教師が指導にあたるティーム・ティーチングを行った際の指導の内容、変容について明らかにすることを目的とする。小学校6年生を対象に授業を実施し分析を行った。その結果、学習を行うにつれて各教師の発言数の変化や発言内容の変容、児童との関わり方の変容等が明らかになった。

キーワード：アクティブ・ラーニング、ティーム・ティーチング、『学び合い』、行動・会話分析

I 問題の所在

中央教育審議会(2014)は新しい時代に必要となる力を子どもたちに育むために、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)や、そのための指導の方法等を充実させていく必要性を示唆している¹⁾。文部科学省(2012)においてアクティブ・ラーニングは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と従来型の授業形態との違いが示された²⁾。また、文部科学省(2015)は教職員等の指導体制の在り方に関する懇談会の提言において、教育の質を高める取り組みとして、国・地方を通じてこれまで進められてきたティーム・ティーチング、習熟度別少人数指導、少人数学級をはじめとする少人数教育の推進は、今後とも重要な政策課題と示した³⁾。

文部科学省(2016)が行った「平成27年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」においての調査内容である、個に応じた指導の実施状況についての項目の内訳をみると、少人数指導を実施する学校の割合は公立小学校、公立中学校共に67.4%、ティーム・ティーチングを実施する学校の割合は、公立小学校において81.0%、

公立中学校において83.3%という調査結果が示された⁴⁾。また、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善に向けた取組の実施状況の項目では、「取組をしている」「実施に向けた準備段階」と答えた公立小学校66.1%、公立中学校62.8%と授業改善に向けた取組みをしている学校も多々ある。

このように指導体制や指導方法の変化が求められる中でティーム・ティーチングの指導体制において授業を行っている学校も多いこと、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善に向けた取組を行っている学校が多くあることが調査結果からも明らかである。

しかしながら、ティーム・ティーチング、習熟度別少人数指導、少人数学級をはじめとする少人数教育に関して、どの指導体制を選択するかによって違いがある。また、文部科学省が定義するアクティブ・ラーニングの指導方法等は複数ありどの方法を取り入れるかは学校や教師に任されている。

現在の学校現場において指導の方法に関する改善と個に応じた指導の実施を強く求められている状態だが、方法や体制が複数あり多様な組み合わせがあることから学校や教師は学級に合ったものを取捨選択しながら授業を行っているのが現状である。

山崎(2003)では、一斉指導におけるチーム・ティーチングにおいて教師と子どもの変容について明らかとなっている⁵⁾。しかしながら、アクティブ・ラーニングを指導方法とし、チーム・ティーチングを指導体制として検討された研究はない。

本研究では、アクティブ・ラーニング実施時にチーム・ティーチングにより2名の教師が授業を実施した際の各教師の発言数の変化や発言内容の変容、児童との関わり方の変容を明らかにすることを目的に、チーム・ティーチングの指導体制は、山崎(2003)で示されているペア・ティーチング形式を使用し⁶⁾、アクティブ・ラーニングは西川純(2016)で示された『学び合い』の考え方を取り入れた授業によって研究を行った⁷⁾。

II 研究目的

アクティブ・ラーニングを導入している学級において、チーム・ティーチングで指導にあたった際の教師・調査者の変容と児童との関わり方の変容について明らかにすることを本研究の目的とする。

III 研究方法

1 調査対象

新潟県J市立T小学校6年の担当教員(教師)
上越教育大学大学院 院生(調査者)
新潟県J市立T小学校6年生児童数:25名
(男子:12名, 女子:13名)

2 調査期間

平成26年9月～12月

3 活動手続き

全11単位時間

4 調査方法

- ・ビデオカメラを教室の前方と後方の計2台設置し、教師・調査者・児童の様子を記録した。
- ・教師・調査者・児童にボイスレコーダーをつけ会話を記録した。
- ・各授業において教師とのリフレクションを実施した。
- ・児童には授業後に毎回、振り返りシートを記入させ、そのコピーを記録した。
- ・教師にインタビュー調査を実施した。

5 分析方法

- ・チーム・ティーチング時における教師・調査者の児童への発言方法(対象)の検討を行う。
- ・発言方法(対象)を明らかにしたうえで、その発言内容についての検討を行う。
- ・各授業の教師・調査者のリフレクションの内容を基にその後の授業における効果と事例の検討を行う。
- ・動画を基に教師・調査者の児童との関わり合いについての検討を行う。
- ・動画を基に教師・調査者が指導した時間の検討を行う。
- ・全授業後の教師へのインタビューにより教師の気持ちの変容を検討する。

IV 結果及び考察

授業を実施した際の教師・調査者の発言数の変化や発言内容の変容、児童との関わり方に変容があることが明らかとなった。

※詳細については当日発表する。

引用文献

- 1) 中央教育審議会：初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)，2014.11.
- 2) 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)用語集，2012.
- 3) 文部科学省：教職員等の指導体制の在り方に関する懇談会(提言)，2015.8.
- 4) 文部科学省：平成27年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について，2016.3.
- 5) 山崎一宏：チーム・ティーチングにおける教師と子どもの会話についての研究，2003.
- 6) 全掲
- 7) 西川純：『学び合い』の手引き，2016.8.